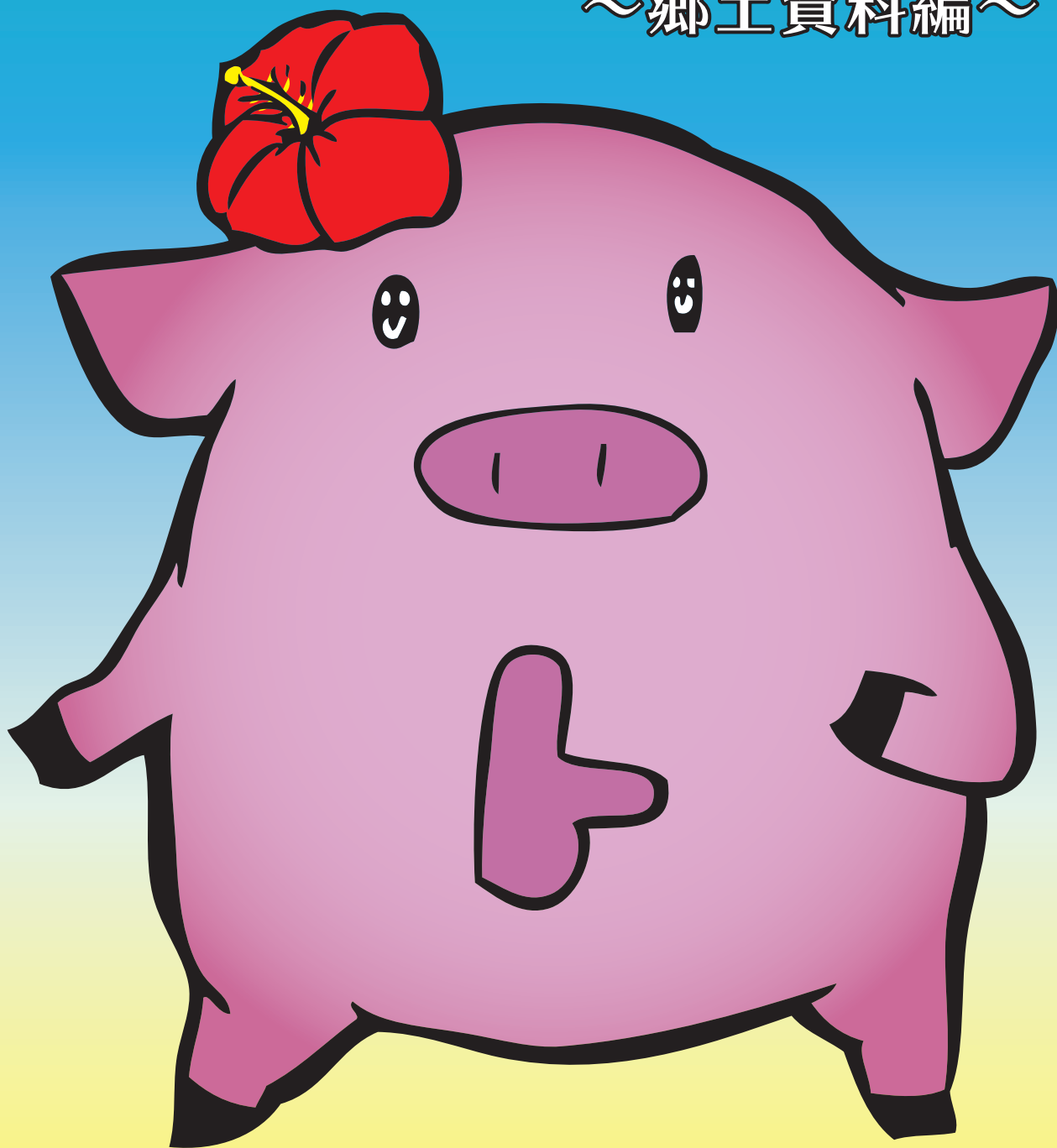
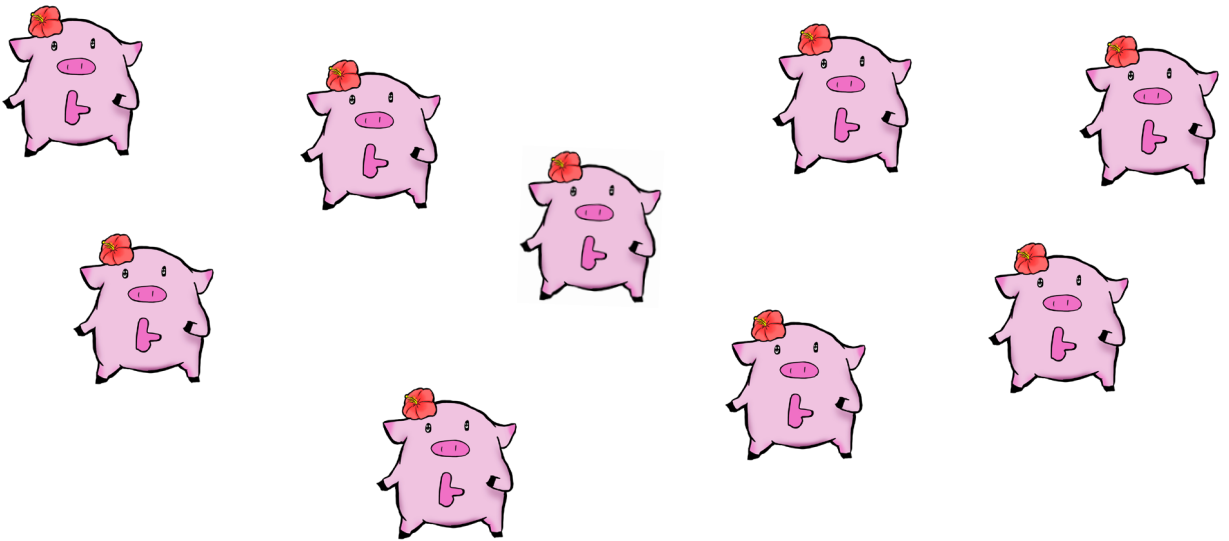


沖縄県立図書館職員が  
本気で薄い本を作ってみた  
～郷土資料編～



全年齢対象

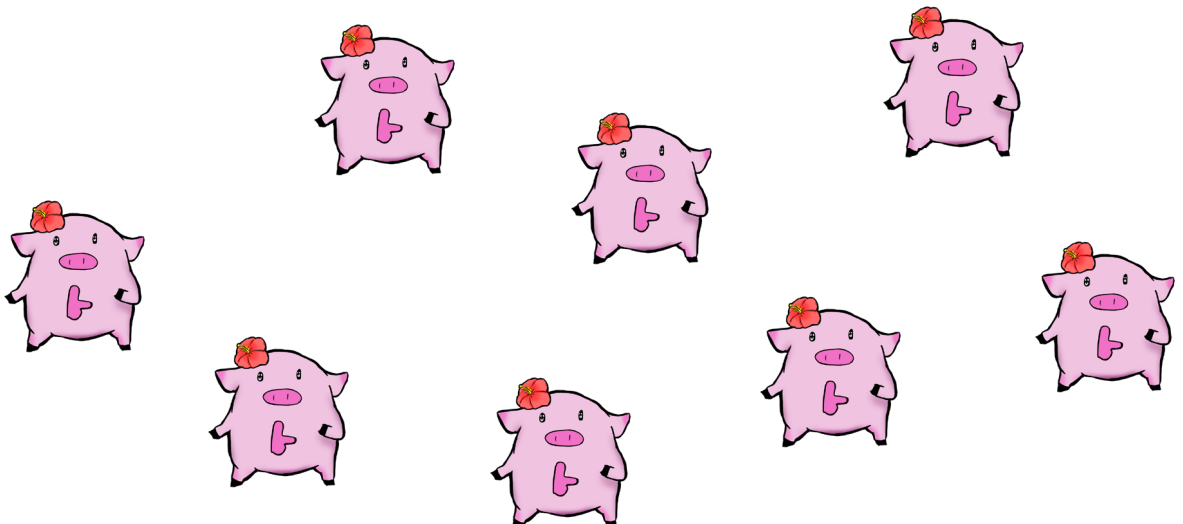




# 目次

---

1. 郷土マンガ・小説紹介
2. 「沖縄を知るための10冊」  
2018年度、2019年度
3. あとがき





# 1. 郷土マンガ・小説紹介

沖縄県立図書館では、以下のような方針に沿って郷土資料の収集を行っています。

- ・地域で出版流通する資料は個人出版物を含め網羅的に収集する。
- ・個人資料など非出版資料の収集も積極的に行う。
- ・郷土に関する研究者や個人蔵書家のコレクションを収集する。
- ・戦災等によって欠落した資料を補填する。

マンガや小説などにおいても例外ではなく、沖縄県出身の作者や、作中に沖縄関係の描写がある作品については「郷土資料」としてできるだけ収集するように努めています。

ここでは、郷土資料として収集したマンガ・小説を郷土担当の職員が独断と偏見でピックアップし、内容や感想について紹介していきます。この紹介をきっかけとして、郷土資料にも興味を持っていただけますと幸いです。

※マンガについては館内閲覧のみとなっており、貸出ができません。

書影については「版元ドットコム」に掲載されているものはそちらから引用し、掲載されていないものについては出版社より掲載の許可を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。



県立図書館3階 おきなわマンガコーナー



## 郷土マンガ・小説紹介

### 『琉球のユウナ』1～5巻(響 ワタル／著 白泉社 2017.11～)

1482年の琉球を舞台とする歴史ファンタジー作品。朱色の髪という風貌と、人ではないものと会話することができるという力のせいで人々から忌み嫌われている少女ユウナ。その少女が第二尚氏の第三代国王・尚真(真加戸)と出会ったことにより、物語は動き出します。史実とファンタジーが程よくミックスされており、ストーリーには系図的な面も絡んでいるので、尚家関係の資料とあわせて読むとより面白さが増すのではないかと思います。作中のとあるキャラクターは第一尚氏の生き残りであるとなっていますが、史実でも第一尚氏は完全に滅ぼされたわけではなく、地方に落ち延びて生き残っていたり一部は第二尚氏の時代に王府に取り立てられたりした人もいたようです。余談ですが、この紹介を書くために初めて少女マンガに目を通したのですが、キャラの配置や展開を見てるとなかなか気恥ずかしくなりますねこれ……。



### 『海色マーチ』1～2(ミナミト／著 芳文社 2019～2020)

某青い袋のお店で紹介されてるのを見て気になっていたら、あまり間を置かずに図書館に入ってきたので「沖縄関連の作品だったんだこれ!」とびっくりしました。作者のミナミトさんは南城市の出身で、作中の宇御島(うおじま)は奥武島がモデルになっているとのこと。1巻冒頭のさかな天ぶらや人慣れしてる猫なんかは言われてみると確かに、という感じですね。紹介を書くにあたって、他の人の感想も参考にしようとレビューを探していたら「ファンから「狂気を抜いて日常の質感を得たキルミーベイバー」という謎の形容がされています」という文面を見つけて笑いました、よもや「キルミーベイバー」の名前をこんなところで見ることになるうとは。しかし、言われてみるとほんのりマイルドでギャグテイストも含んだバイオレンスがところどころ見え隠れしますねこの作品。表紙からは想像できないテイストです。あと、作中で「沖縄県民は泳げない人が多い」ってのがありますが、某Jリーガーや某プロゴルフ選手も「海は泳ぐものじゃありません、見るものです」って言ってたので何の違和感もないですね。全2巻で完結ですが、ここで終わるのは惜しいなあという作品、もう少し続きが読みたかったです。モチーフになった奥武島については、『奥武島誌』を見ると歴史や文化について知ることができますよ。また、奥武島では「嶺井」姓が多く4年に一度親族対抗によるオリンピックも開かれており、現在横浜DeNAベイスターズに所属する嶺井博希選手もルーツは奥武島だとのこと。



## 郷土マンガ・小説紹介

### 『腸よ鼻よ』01(鳥袋 全優／著 KADOKAWA 2019(令和1).9)

「指定難病」と聞くとどことなく重苦しい雰囲気が漂いますが、マンガの内容はそれを感じさせないほどのすがすがしいまでのギャグテイスト作品。作者の患っている潰瘍性大腸炎は安倍晋三前首相が辞任の際にその理由として取り上げたことで広く知られるようになり、それから公表されることが増えているように感じます。沖縄県関係では、2020年5月に琉球ゴールデンキングスに所属する岸本隆一選手がこの病気の診断を受けたとしてチームから公表されていますが、10日ほど治療のために入院し、現在は再び主力として2020-2021シーズンを戦っています。岸本選手や安倍前首相のように投薬治療によってコントロールできる場合もあるようですが、作者の場合は腸炎の症状が長く続くタイプであり、頻繁に入退院を繰り返しながらマンガを画く様子が作中でも描写されています。しかし、前述のようにいろんな種類のギャグやパロディを織り交ぜて描かれていることにより、「難病」という言葉のイメージからくる重苦しさをあまり感じさせることなく物語が進んでいくので、テンポよく読み進めていくことができるのではないのでしょうか。



### 『女の園の星』1(和山 やま／著 祥伝社 2020(令和2).7)

作者の和山やまさんは糸満市出身のマンガ家です。2019年のコミティアで頒布された同人誌が書籍化された『夢中さ、きみに。』は、ジュンク堂書店池袋店のコミックフロア担当をして「溶けるように売れている」と言われるほどのヒットとなりました。同作は、2020年発表の第23回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞と第24回手塚治虫文化賞短編賞をダブルで受賞しています。そんな作者の初の連載作品となったのが本作『女の園の星』です。女子高を舞台にした日常を少しおもしろおかしく展開していくのですが、個人的に印象に残るのが「キャラクターの表情」です。虚空を見つめて一瞬真剣に考えたかと思えば、次のページでは現実に引き戻されたように「はっ」とした表情のどことなくかわいさが漂う感じなど、1話から見所は目白押しではないのでしょうか。5話で星先生の表情がころころ変わる話も好きなのですが、ストーリーとしては3話のシュールな内容もとても面白く感じました。そんな本作は、「このマンガがすごい！2021」オンナ編の1位とApple Books Store「今年のベストマンガ」の「2020年ベスト女性マンガ」に選ばれており、今後ますます注目の作品となっています。





## 郷土マンガ・小説紹介

### 『沖繩で好きになった子が方言すぎてツラすぎる 1』

(空 えぐみ／著，譜久村 帆高／うちなーぐち監修 新潮社 2020(令和2).7)

「Twitterでめっちゃバズってたウチナーグチネタのマンガ」と言えば「ああわかる」「そういえばタイムラインに流れてきた」という人も少なからずいるのではないのでしょうか。沖繩の人にはいわゆる「あるある」ネタなと、他県の人には一種の「異文化」的な面がウケて盛り上がったんじゃないかなあとと思います。沖繩県民は地元愛が強く身内ネタが好きって話もありますしね。知ってました？書店で都道府県別の地域本コーナーができるのって沖繩ぐらいしかない（沖繩本）らしいですよ？作者の空えぐみさんは大阪出身ですが2年半ほど前に沖繩に移住し、その後に驚いた実体験も作中には描かれています。繰り返しますが、「海は泳ぐものではなく見るもの」です（そういえば「水着を着て海に入るのは観光客だけ」という話もありましたっけ）。6話で沖繩でしか通じない表現が紹介されていますが、他に有名どころだと「ひざまずき（正座）」も沖繩でしか通じないらしいとのことで。あ、あとこれはよく知られてると思いますが、コンビニで「おにぎり温めますか」って聞かれるのも沖繩だけです。



### 『天久鷹央の推理カルテ』[1] (知念 実希人／著 新潮社 2014.10～) 天久鷹央シリーズ

沖繩生まれで現役の医師でもある作者が送る医療系ミステリー小説。以前にデビュー作の『誰がための刃 レゾンデートル』を読んだことがあり知念先生ことは存じていたのですが、その方の作品がまさかといういづ氏の絵を表紙にまもって出版されるといのはちょっと予想外でした。レーベルの新潮文庫nexが「今までの新潮文庫がカバーできていなかった「次」の領域へ。漫画やライトノベルの「次」に手に取れる小説へ。」という意味を込めてのネーミングとのことなので、おそらくは読んでもらいたい年齢層がアプローチしやすいようにこのような形にしたのかもしれませんが（実際他の本の表紙もあまりお硬い感じではない）。

天医会総合病院を舞台とし、その統括診断部部長である学生に見間違えられるような外見の天久鷹央と、元々は外科医だったが思うところがあり、内科医を志し統括診断部に配属された小鳥遊遊（たかなし ゆう）のコンビをメインとして物語は進んでいきます

（余談ですが、小鳥遊の読みは某作品のおかげで読むのに難儀しなくなりました）。あるインタビュー記事で作者が「僕の売りはスピード感。常に物語を転がして、一気に読ませる文体を心がけている」と答えているように、時には多少難しい医療用語も出てくるものの、そういう難しさを感じさせることなく、一気に読みすすめていくことができるのではないかと思います。映像化されても面白い作品なんじゃないかなあと考えており、個人的にはアニメ化の方をちょっとだけ期待しています。読んでいる時に脳内で聞こえてきたボイスは天久が少し低めで逆に小鳥遊は若干高めだったんですが、ビジュアルを見てると「小鳥遊この顔で高めの声はなんか違う気がするんだよなあ……」とも感じってしまうのがなんとも面白いところですね。



## 郷土マンガ・小説紹介

### 『僕は僕を書いた小説を知らない』（喜友名 トト／著 双葉社 2018.9）

主人公の岸本アキラはバイク事故の後遺症により、1日ごとに記憶がリセットされるという障害を負ってしまう。PCの中に過去の自分から残されていたのは今までの行動や経験がまとめられた「引継ぎ」と5万字を超える小説の原稿だった。「引継ぎ」の最後に書かれていた「負けるものか。諦めるものか。」の言葉を支えに書き残された小説の執筆にとりかかるが……。

似たようなジャンルとしてタイムスリップものやタイムリープもの、異世界転生ものを思い浮かべましたが、あちらが「現在の記憶をもったまま過去・未来や異世界に行く」のに対して、この作品は「時の流れは変わらないが1日ごとに記憶がリセットされる」というところに大きな違いがあります。基本的に頼ることができるのは過去の自分が書き残し、積み重ねてきた「引継ぎ」と、症状についての事情を知っている妹やごく一部の友人だけという過酷な環境に置かれた主人公ですが、それでも「最高の物語を残したい」という思いのもとに小説を書き進めていきます。作中に出てくるあるアイテムが何かの伏線なのかなあというのは容易に想像でき、その種明かしは最後になされます。「誰のものか」というのは文中に出てきた時点ですしていた予想がだいたい当たっていましたが、「いつのものか」についてはちょっと外れていました。というか最後の方の文章がかなり予想外で、それを踏まえた上で読み返してみるとああなるほどな、と感じたので、多分勘のいい人だったら読んでてわかるんじゃないだろうかと思います。最終ページの3行の締め、個人的に「なるほど、そうきたか」となりました。実際作者の喜友名トトさんも、ご自身で最後の1行をお気に入りとして挙げられています。



### 『カミカゼの邦』（神野 オキナ／著 徳間書店 2018.9）

作者の「神野オキナ」という名前を聞いて『あそびにいくヨ!』や『疾走れ、撃て!』などのタイトルが出てくる人はなかなかのライトノベル読者ではないかと思われれます。そんなライトノベル作家として数々の著作を世に送り出している作者が、一般文芸書として新たに書き下ろしたのが本作『カミカゼの邦』です。登場人物の背景にある「沖縄紛争」に至る要因としては、現実の世界が抱えている沖縄・日本の関係や国際情勢を下敷きとはしているもののその「紛争」を直接的に描写した話は序章だけであり、以降は「戦後」の物語として舞台を東京に移し展開していきます(といっても序章だけで結構な分量があり、濃密な描写となっています)。しかし、現代情勢を下敷きにはしているとはいっても決して政治色の強い作品ではなく、あくまで「エロス&バイオレンスなアクション小説」というのがこの作品の性質です。文章によるアクション表現は想像力を掻き立てられ、早く次の展開が知りたいとページをめくる手が止まりませんでした。もし映像化するなら、テレビよりも2時間半ぐらいの映画にしてどっぷり濃密な描写で見たい、といったところですね。



## 郷土マンガ・小説紹介

なお、著者の代表作として前述した『あそびにいくヨ!』は2010年7月～9月の期間にアニメ化され、沖縄でも琉球朝日放送(QAB)にて1か月程度の遅れで放送されていました(当時は配信環境もそれほど整っていたわけではないので、このぐらいのラグで放送されるのもかなり珍しかったんです)。その2話で与儀公園周辺が描かれているシーンがあるのですが、その中でなんと沖縄県立図書館の旧館が出てくるんですよ! 玄関と館内の一部を描写したシーンなのですが、かなりの再現度の高さに「ちゃんと沖縄でロケハンして資料作ってたんだなあ」と感心しました。それと同時に「職場が聖地化したwwwwww」と草を生え散らかしたのも今となっては懐かしい思い出です。現在同作の原作小説は残念ながら当館での所蔵はありませんが、アニメは各種配信サイトで見る事ができるようになっていますので興味のある方はぜひご覧ください。



沖縄県立図書館 旧館  
2018年6月29日 筆者撮影



都合により  
画像を非表示に  
しています。

上記4点は全てアニメ『あそびにいくヨ!』第2話「あそびきにました」より引用  
玄関だけでなくテーブルやイス、館内の雰囲気はかなり現実に近く描写されており、  
当時は大笑いすると同時にかなりびっくりしたものです。



## 2. 「沖縄を知るための10冊」 2018年度、2019年度紹介

「知るための10冊」は、沖縄の歴史・文化や沖縄研究への理解を深めることを目的としています。

沖縄は独自の歴史、文化、自然を育んできた土地であり、数多くの「沖縄」を対象とした本が県内外から発行されています。

その中から、専門家(研究者や有識者)の方々にそれぞれの分野について「知るための10冊」というテーマで、お勧めの本を選んでいただきました。

ここでは、2018年度と2019年度に展示した「知るための10冊」の中から、それぞれ3テーマずつを取り上げ、その際に展示された資料もあわせて紹介します。

### ここが違う！沖縄本ナビ～知るための10冊

○ただの本の紹介にはならないように選んでいただきました。

紹介している本は、初心者向けから専門的な本までと幅広く、予備知識のない方から詳細に知りたい方まで活用できるブックリストになっています。1冊1冊の本を楽しむだけでなく、この10冊を通して見えてくる多角的な沖縄の姿や過去の歩みを感じ取れるブックリストに仕上がっていますので、これまでよくある図書館のブックリストとは一味違います。

○沖縄県立図書館に所蔵があります。

ブックリストで紹介している資料は、全て沖縄県立図書館にて所蔵されています。紹介されている資料が近くの図書館で所蔵されていない場合は、相互貸借サービスを活用して取寄せることもできます。

ただし貴重な資料もあり、貸出用がご用意できないものもあります。その場合は、沖縄県立図書館の郷土資料室にて閲覧用をご利用ください。いろいろなタイプのイスを用意していますので、お気に入りの場所を見つけて読書をお楽しみください。



---

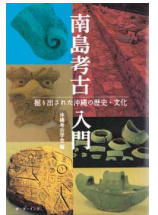
沖縄本ナビゲーション2018年度版  
～知るための10冊～



## 沖縄の歴史を知るための10冊 高良倉吉(琉球大学名誉教授)・選

### 『南島考古入門』沖縄考古学会編(2018) ボーダーインク

四十年ぶりに沖縄考古学会が「考古学の成果を市民のなかへ」というスローガンのもとに執筆された沖縄考古学の最前線の書であり、普及書の決定版。沖縄考古学会の総勢70名が書き下ろした充実の内容。



南島考古入門

### 『琉球の時代—大いなる歴史像を求めて』高良倉吉(1980) 筑摩書房

中国、マラッカやポルトガル等、海外の文書に記された当時の琉球王国の姿を文献資料から読み解き、沖縄独自の文化と世界像に新たな光をあてる一冊。



琉球の時代

### 『新装版 海の王国・琉球』上里隆史(2018) ボーダーインク

歴史家・上里隆史が描く、国境を越えた「海域史」という視点からの琉球王国の形成と展開の歴史。港湾都市として栄えた那覇を中心に活発に展開された交易ネットワークを捉えた新たな琉球史研究。



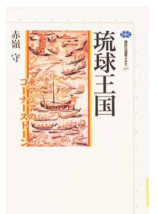
新装版 海の王国・琉球

### 『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』赤嶺守(2004) 講談社

海の通商王国=琉球。その繁栄の糸口は明の倭寇対策にあった。交易を担う華僑たちの実像や中国進貢の旅の様子など、史料を駆使し、新たな琉球像を提示する。

### 『琉球王国の外交と王権』豊見山和行(2014) 吉川弘文館

1609年の薩摩藩による琉球攻略から1879年の明治政府による琉球処分まで、王国独自の政治外交と王権の特質に迫る。近世の琉球王国を前近代における国家の一類型とする注目の書。



琉球王国

### 『琉球王国の外交と王権』豊見山和行(2004) 吉川弘文館

1609年の薩摩藩による琉球攻略から1879年の明治政府による琉球処分まで、王国独自の政治外交と王権の特質に迫る。近世の琉球王国を前近代における国家の一類型とする注目の書。



琉球王国の外交と王権

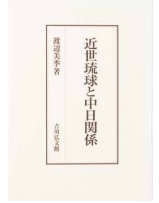


# 沖縄本ナビゲーション2018年度版～知るための10冊～



## 『近世琉球と中日関係』渡辺美季(2012)吉川弘文館

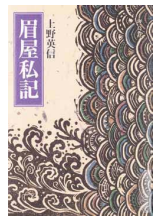
近世の琉球は、日本と中国の“狭間、にあって、どちらにも包摂されない特異な地位を維持した。その外交実態や意識構造を探り、琉球固有の歴史的意義を東アジアの国際環境の中に位置づける意欲作。



近世琉球と中日関係

## 『眉屋私記』上野英信(1984)潮出版社(復刊2014、海鳥社)

やんばるの屋部村、眉屋一門の150年を通し、名も無き人々の生き様、歩みから近代沖縄の姿を描き出した。上野英信が沖縄からメキシコまで10年の取材を通して書き上げた記録文学。



眉屋私記

## 『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』

### 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編(2017)沖縄県教育委員会

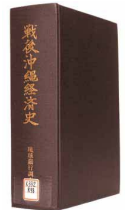
これまでの沖縄戦研究の成果をまとめる一方、いままであまり取り上げられてこなかった「障がい者」「ハンセン病者」「戦争トラウマ」「不発弾」などの分野にも光をあてた沖縄戦研究に新たな視点を開く一冊。



沖縄県史 各論編6  
沖縄戦

## 『戦後沖縄経済史』琉球銀行調査部編(1984)琉球銀行

1945年から1972年までの米国統治下の経済政策を中心に、沖縄経済をまとめた大著。琉球銀行の創立30年記念事業として出版された。



戦後沖縄経済史

## 『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』

### 櫻澤誠(2015)中央公論新社

広大な基地を抱えて復帰した沖縄の戦後70年の道のりを、政治・経済・文化と多面的に捉え、その複雑な歩みの歴史的背景を読み解く視点を提示する。



沖縄現代史



## 沖縄の地図を知るための10冊

安里 進(沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員)・選

<絵図4点>

### 「首里古地図」(18世紀前半) 沖縄県立図書館蔵

王府時代に使用されたとみられる首里城下の市街図。原図は沖縄戦で焼失。県立図書館が所蔵するものは東恩納寛淳が1910年に複製した原寸図。



首里古地図

### 「琉球国之図(薩摩藩調製琉球図)」 (18世紀末) 沖縄県立図書館蔵

首里王府が作成した「間切島針図」(1737～1750年)を縮小改訂した「琉球惣絵図」(1700年代後半)をさらに縮小改訂したものとみられる。作成者は題名の薩摩藩ではなく首里王府だとみられている。



琉球国之図

### 「首里城図」友寄喜恒作(王国末期) 沖縄県立図書館蔵

王国時代の公的な画家(=絵師・えし)であった友寄喜恒(ともよせ・きこう)が明治以降に描いた作品。



首里城図

### 「首里那覇図」阿嘉宗教作(王国末期) 沖縄県立図書館蔵

作者の阿嘉宗教(あか・そうきょう)は王国末期から明治にかけて多くの鳥瞰図を制作した。地図的要素と絵画性が見事に一体化している作品。



首里那覇図

# 沖縄本ナビゲーション2018年度版～知るための10冊～

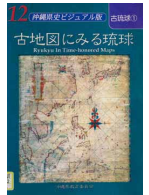


<書籍6点>

## 『沖縄県史ビジュアル版12古琉球① 古地図にみる琉球』

(財)沖縄県文化振興会史料編集室編(2003) 沖縄県教育委員会文化課

1993年にスタートした新沖縄県史編集事業の一環により発行されたビジュアル版の12冊目。貴重な資料が豊富に収録。



古地図にみる琉球

## 『琉球国絵図史料集』(第1～3集)

沖縄県教育委員会文化課編(1992～1994年) 榕樹書林

正保・元禄・天保の各年間に幕府の命によって編纂された琉球国絵図の全体像をオールカラー図版で復元し、関連史料の影印と翻刻を加えた。各巻共A全版原色刷の地図枚を附す。

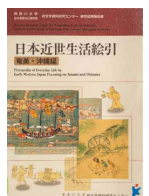


琉球国絵図史料集

## 『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』(2014)

神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター

絵巻物などの一場面を取り出して、描かれている事物や行為を解説する“絵引”。本書には「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」の“絵引”が収録されている。

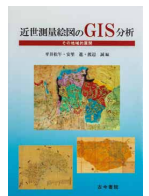


日本近世生活絵引  
奄美・沖縄編

## 『近世測量絵図のGIS分析—その地域的展開—』

平井松午・安里進・渡辺誠編(2014) 古今書院

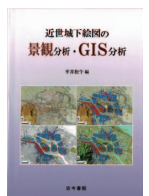
江戸時代各地域の測量事業と古地図・絵図の測量精度についての論文集。琉球王国の科学技術水準が本書で示されている。



近世測量絵図の  
GIS分析

## 『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』平井松午編(2019) 古今書院

江戸時代の城下絵図に焦点をしばった2019年3月刊行の論文集。「首里那覇鳥瞰図」をめぐる景観分析論文が掲載されている。

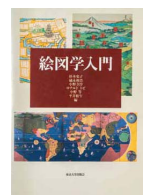


近世城下絵図の  
景観分析・  
GIS分析

## 『絵図学入門』杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・

ロナルド・トビ・中野等・平井松午編(2011) 東京大学出版会

近世に開花し、当時の世界観や社会への認識など多くを語る絵図。その基礎知識から調査・公開の具体的方法までを、多彩な分野の専門家がわかりやすく解説。絵図から歴史にアプローチする総合的入門書。



絵図学入門



## 沖縄の写真を知るための10冊 新里 義和(八重山商工高校教頭)・選

### 『沖縄文化の遺宝』鎌倉芳太郎(1982)岩波書店

鎌倉芳太郎が戦前に撮影した、首里城をはじめとする建築群、絵画、工芸品などは、沖縄の当時の風景や貴重な文化財の姿を今に伝えている。



沖縄文化の遺宝

### 『沖縄・昭和10年代』坂本万七(1982)新星図書出版

柳宋悦の琉球民芸調査に同行した写真家・坂本万七が戦前の沖縄を撮影した貴重な写真を数多く収録。



沖縄・昭和10年代

### 『大琉球写真帖』大琉球写真帖編集委員会編(1990)

#### 大琉球写真帖刊行委員会

写真家・石川真生らが呼びかけ、沖縄の一般家庭に残る戦火を逃れた個人個人の写真を集めた写真集。



大琉球写真帖

### 『神々の古層』(全12巻)比嘉康雄(1989-1993)ニライ社

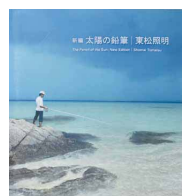
久高島や宮古島をはじめ、奄美諸島まで連なる琉球弧の島々における祭祀を記録した全12巻からなるシリーズ。時代と共に変化し、失われつつある祭祀の姿と比嘉康雄の眼差しを今に伝える。



神々の古層

### 『新編 太陽の鉛筆』東松照明(2015)赤々舎

『太陽の鉛筆』(1975、毎日新聞社)を再収録した『太陽の鉛筆1975』と未発表作品を含む103点を伊藤俊治と今福龍太による編集で構成された『太陽の鉛筆2015』の2冊組み。



新編 太陽の鉛筆

# 沖縄本ナビゲーション2018年度版～知るための10冊～



## 『熱き日々 in オキナワ』石川真生 (2013) フォイル

復帰まもない沖縄の基地の街の黒人バーで働く女性や米兵の姿を赤裸々に撮った写真集。帯文より「そこには愛があった」。



熱き日々 in オキナワ

## 『父ちゃんは写真家 平敷兼七遺作集』平敷兼七 (2016) 未来社

島の日々や社会の辺縁に生きる人々にレンズを向け続けた平敷健七の遺作集。家族も編集に参加し、残された膨大なプリントを再編した一冊。



父ちゃんは写真家  
平敷兼七遺作集

## 『大城弘明写真集 地図にない村』

### (沖縄写真家シリーズ「琉球烈像」第4巻) 大城弘明 (2010) 未来社

沖縄戦最大の激戦地のひとつであり、今はその名を失った三和村福地。そこで生まれ育った大城弘明が「ンマリジマ=生まれ故郷」を撮った写真集。



地図にない村

## 『絶景のポリフォニー』石川竜一 (2014) 赤々舎

生まれ育った沖縄で人や風景を切り取った一枚一枚が強烈な印象を残す。同書と『okinawan portraits 2010-2012』で第40回木村伊兵衛写真賞を受賞。



絶景のポリフォニー

## 『終わらない旅 北/南』森山大道 (2014) 沖縄県立博物館・美術館

2014年に開催された展覧会の図録として、沖縄を撮影した「南」と、北海道を撮影した「北」のそれぞれの図版と、石川直樹や大竹昭子らによるテキスト集を加えた3冊組で発行された。



終わらない旅 北/南



---

沖縄本ナビゲーション2019年度版  
～知るための10冊～

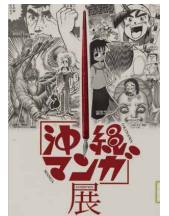


## マンガを知るための10冊 島袋直子(マンガ編集者)・選

### 『沖縄県立博物館・美術館企画展「沖縄マンガ」展』

島袋直子編(2010)文化の杜共同企業体

2010年7月1日～8月29日に沖縄県立博物館・美術館で開催された展示会の図録。「全国で活躍するマンガ家」や「マンガ家インタビュー」などを1冊に凝縮。巻末には「沖縄マンガ略史」があり、時系列で沖縄マンガの流れを知ることができる。



沖縄県立博物館・美術館企画展「沖縄マンガ」展

### 『沖縄キリスト教学院大学論集 第7号』「沖縄マンガ史・試論 —沖縄マンガの黎明期—」大城亘武(2010)沖縄キリスト教学院大学

「沖縄マンガ」の始まりを知りたいなら必読の論文。「沖縄マンガ」の始まりを葛飾北斎の描いた『琉球八景』に求め、琉球処分頃の沖縄を描いた風刺画や明治時代の新聞を調査。宮古島出身の本土で活躍した下川凹天についても知ることができる。



沖縄キリスト教学院大学論集第7号

### 『時事漫評』渡嘉敷唯夫(1995～2000)沖縄タイムス

戦後、「沖縄マンガ」の草分けとなった渡嘉敷唯夫による一コマの風刺漫画「時事漫評」は、1955年から2000年まで沖縄タイムス紙に連載された。個性的で風刺の効いた作品はその時代時代の沖縄を鋭く切り取っている。



時事漫評  
1961年9月3日  
沖縄タイムス

### 『歴史劇画 沖縄決戦』新里堅進(1978)月刊沖縄社〔前編〕〔後編〕

沖縄戦をライフワークとし、描き続ける新里堅進によるストーリーマンガ。1978年に月刊沖縄社から発行されたデビュー作。その後も当事者の手記や丹念な取材を基に沖縄にこだわった崎品を発表している。



劇画 沖縄決戦

### 『わたるがぴゅん』1巻～58巻 なかいま強(1985～2004)集英社

1984年から「月刊少年ジャンプ」で連載が始まり、2004年に連載が終了した沖縄出身の与那覇わたるが野球部で活躍するストーリー。主人公のわたるのウチナーグチが話題となった。なかいま強のデビュー作。全58巻。



わたるがぴゅん



# 沖縄本ナビゲーション2019年度版～知るための10冊～



## 『月刊コミックおきなわ』

### コミックおきなわ社(1987～1990)コミックおきなわ社

沖縄のマンガ家育成および作品発表の場として作られた月刊誌。20歳前後の作家が続々とデビューし、若手作家の登竜門となった。1989年に隔月刊となり30号で休刊。



月刊コミックおきなわ

## 『おばあタイムス』大城さとし(2014)沖縄タイムス社

沖縄タイムス紙面の4コママンガ「おばあタイムス」は2005年に連載開始。元気なおばあと、優しくて長身のおじいの沖縄の日常が舞台。はーやー先輩など人気のキャラクターも。単行本は第1巻が2014年に発売され、現在は第5巻まで発売されている。



おばあタイムス

## 『実話・地名笑い?!話 本部編』南原明美(2014)コミチャン

知り合いが実際に体験した、または聞いたという地名に関する笑える話をマンガ化。沖縄県内の面白い地名を調査、取材。ウェブサイト「コミックチャンプル」で連載後、単行本として発行された。



実話・地名笑い?!話  
本部編

## 『ファミマガ』

### ファミマガ製作実行委員会(2015～2017)沖縄ファミリーマート

沖縄県内のファミリーマートで販売された県産マンガ。沖縄ファミリーマートをプラットフォームとして、人材育成プロジェクトの要素も取り入れた企画。2017年発行の6号で休刊している。



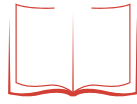
ファミマガ 創刊号

## 『さくらの花のように』山里米子(2019)自費出版

名護市羽地で生まれた女の子「さくら」の成長を通して、出産祝いやタンカーユエー、旧盆などの伝統行事から、地域の文化を学ぶことができる絵本。本文は日本語と英語で書かれている。



さくらの花のように



## 首里城を知るための10冊 田名 真之 (沖縄県立博物館・美術館館長)・選

### 『写真集 首里城』(1987) 那覇出版社

1986(昭和61)年11月首里城復元が閣議決定されたことから、あらためて首里城とは何か、多くの人々に知ってもらいたいとして編まれた写真集。在りし日の首里城、周辺の円覚寺、尚家邸(中城御殿)など鎌倉芳太郎や田辺泰、阪谷良之進らの写真や図で紹介し、島尻勝太郎らの解説を添えている。同種書籍の魁を成す写真集である。



写真集 首里城

OKINAWA BUNGO

### 『首里城入門』

首里城研究グループ編



首里城入門

OKINAWA BUNGO

### 『首里城物語』

真栄平房敬



首里城物語

### 『首里城物語』真栄平房敬(1989) ひるぎ社

戦前尚家に入り出て行きの手伝いをしたり、城内の小学校に勤務していた氏だからこそその著作である。城内の主要建物の概説、尚家ででの見聞を通してのかつての城内での儀礼、祭礼や国王の暮らし、王妃選びの手順など貴重な記録となっている。

### 『琉球王府 首里城』碧水社編(1993) ぎょうせい

復元なった首里城の開園を記念した書。正殿の全景、内部の御差床など多くの写真(100ページ)で紹介した大型本。いかにして復元がなされたか詳細な記録となっている。

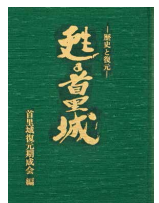


琉球王府 首里城

### 『甦る首里城 歴史と復元』

### 首里城復元期成会編(1993) 首里城復元期成会

首里城復元を記念した書である。3部構成で1部が首里城の歴史や儀礼、建築など又吉真三氏など8人が分担執筆。2部は首里城復元運動の記録、3部が資料編である。復元に関わる多方面の貴重な資料が収録されている。



甦る首里城  
歴史と復元

# 沖縄本ナビゲーション2019年度版～知るための10冊～



## 『首里城を救った男—阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』

野々村孝男(1999) ニライ社

1930(昭和5)年の首里城解体修理の責任者だった文部技官の阪谷良之進と現場責任者で宮大工の柳田菊造の足跡を追い、功績を検証した書である。二人の奮闘努力を検証し、その功績は顕彰されるべきだとの野々村の執念には敬服するほかない。



首里城を救った男—  
阪谷良之進・  
柳田菊造の軌跡

## 『首里城の復元—正殿復元の考え方・根拠を中心に—』

首里城公園友の会編(2003) 海洋博覧会記念公園管理財団

首里城復元10周年の記念事業として出版された書。関連資料の調査、収集から復元の根拠となった文献資料の分析、活用の経緯など。また正殿の構造、造作、瓦、塗装、彩色など各々を検討し確定していった過程を丁寧に解説。



首里城の復元—  
正殿復元の考え方・  
根拠を中心に—

## 『首里城復元記載会会報』1～25号

(1982-2007) 首里城復元期成会

首里城復元期成会の機関誌。シンポジウムの開催や龍樋周りの冊封使の石碑の復元、国王頌徳碑、真珠湊碑の復元事業などの会の活動などを収録。期成会の30余年にわたる活動、復元に果たした役割を確認することができる。



首里城復元記載会会報

## 『首里城研究』1～20号(1994-2018～) 首里城公園友の会

首里城研究会の機関誌。琉球・沖縄の歴史、文化に関する2カ月に1度の研究発表会の一部を掲載。内容は多岐にわたる。さまざまな論文が収録されており、先端を行く議論が展開されている。



首里城研究

## 『報道特集 首里城』(2019年11月15日) 沖縄タイムス社

『甦れ! 首里城』(2019年12月2日) 琉球新報社

2019年10月31日の首里城炎上を受けて県内新聞社から相次いで出版された。火災時のドキュメントだけでなく、首里城の歴史や文化財などの記録写真も収録。ともに経費を除いた販売利益は再建募金に寄付される。



報道特集 首里城 甦れ! 首里城



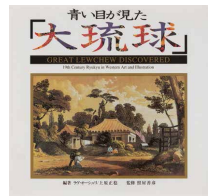
## 観光を知るための10冊

下地 芳郎(沖縄観光コンベンションビューロー会長)・選

### 『青い目が見た「大琉球」』

ラブ・オーシュリ、上原正稔編(初版=1987/改版=2000)ニライ社

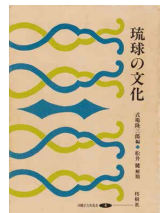
16世紀以降のヨーロッパによるアジア進出に伴い、琉球を訪れた欧米人が残した挿絵や版画などを紹介。特にバジル・ホール航海記やペリー提督遠征記から引用された絵には、琉球王国時代の首里や那覇など各地の自然豊かな風景や庶民の生活などが描かれている。



青い目が見た「大琉球」

### 『琉球の文化』式場陸三郎編(初版=1941/復刻版=1995)榕樹社

戦前に沖縄を訪れた日本の民藝協会の運動家らによって刊行された一冊。執筆は柳宗悦を中心に河井寛次郎、式場陸三郎、島袋全発、写真家の坂本万七らによる琉球文化論で、沖縄観光の本質は独特の琉球文化であることを示している。



琉球の文化

### 『海—その望ましい未来 沖縄開催のあゆみ』

沖縄県(1976)沖縄県沖縄国際海洋博覧会協力局

1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会は、世界で初めて海をテーマに開催された国際博覧会である。本書は、沖縄県が開催までの経緯や内容をまとめた記録集である。



海—その望ましい未来  
沖縄開催のあゆみ

### 『どうする！観光沖縄』渡久地政夫(1976)沖縄観光

海洋博覧会後の効果的な誘客対策と観光地整備の重要性などを考察した一冊。沖縄観光の発展に必要な緑化、健全なナイトライフ、県民への啓蒙活動などを説いている。沖縄観光の自立化に向けた筆者の思いが伝わる。



どうする！観光沖縄

### 『リゾート開発—沖縄からの報告』三木健(1990)三一書房

全国的にリゾート開発が進み、沖縄県内でもホテルやゴルフ場の急激な開発による環境破壊や水不足などの課題を挙げている。地域住民の視点を重視した開発が重要であると指摘。新たなホテル建設が多数計画されている現在の沖縄にもあてはまる。



リゾート開発  
—沖縄からの報告

# 沖縄本ナビゲーション2019年度版～知るための10冊～



## 『沖縄の観光を考える百人委員会』

(2000) 沖縄観光コンベンションビューロー

沖縄観光コンベンションビューローが県内外の有識者や観光関係者で設置された委員会によるシンポジウムと提言をまとめたもの。21世紀の沖縄観光の国際化や、アジア・太平洋地域における国際コンベンション都市を目指すうえで必要となる取り組みに関して議論が行われた。

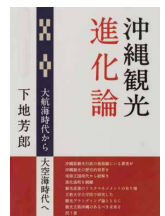


沖縄の観光を考える百人委員会

## 『沖縄観光進化論—大航海時代から大空海時代へ』

下地芳郎(2012) 琉球書房

琉球王国時代から現在に至るまでの沖縄観光の歴史と沖縄県の観光推進体制や予算推移、修学旅行、リゾートウエディング、観光危機管理などを中心に観光政策的視点から解説している。



沖縄観光進化論

## 『沖縄観光の父 宮里定三』(2016) 宮里定三顕彰事業実行委員会

戦前、戦後を通じ沖縄観光を牽引し、現在の沖縄観光の基礎を築いた「沖縄ホテル」創設者宮里定三氏の歩みと功績を、県内の観光関係者がまとめた記念誌である。宮里氏は「かりゆしウエア」の生みの親でもある。

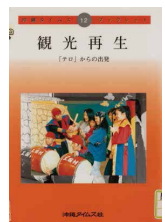


沖縄観光の父 宮里定三

## 『沖縄タイムス・ブックレット 12 観光再生 「テロ」からの出発』

沖縄タイムス社(2002) 沖縄タイムス社

2001年9月に発生した米国同時多発テロ事件以降、修学旅行を中心に一時沖縄への観光客は減少。当時の沖縄県内の厳しい経済状況や沖縄県・観光業界等への緊急対策の推移に関して、沖縄タイムス紙に連載された記事を書籍にしたものである。



観光再生 「テロ」からの出発

## 『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること

—沖縄・米軍基地観光ガイド』矢部宏治(2011) 書籍情報社

県内米軍基地28施設の概要、憲法と日米安保、基地周辺の観光スポットなどを紹介。沖縄県には「観光リゾート地」としての一面だけでなく、「米軍基地」の存在に起因する事件・事故などに苦しむ一面もある。沖縄への理解を深めるために観光客にも読んでほしい一冊である。



本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること—沖縄・米軍基地観光ガイド

### 3. あとがき

「おでライに出るぞ」という告知ツイートのあと、リツイートやいいねの数、さらにはそのツイートに言及してるコメントなんかをあれこれと見て「思ったよりえらいことになりそうだなこれ…」と内心かなりビビり散らかしてました。のワの<ミテマ>

けど、やるからには「県立図書館のメインコンテンツである郷土資料にもっと注目してもらいたい」と思い、その一環として今回はマンガ・小説を取り上げました。これらも立派な「郷土資料」であり、その収集のために職員も情報収集に励んでいますが、不慣れなジャンルのためまだまだ力不足だというのが正直なところです。「この作者は沖縄出身だぞ」「この作品の中で沖縄関連の描写がありましたよ」というのを見つけたら、県立図書館まで情報を提供して頂けるととても嬉しいです。あなたからの情報が郷土資料の蔵書を強化することに繋がります。最近だと『はるかなレシーブ』はアニメでがっつり沖縄描写が入ってて盛り上がる作品でしたね。

あまりお固い内容にならないように、そしてその中でどのぐらい自分の色を出しながらコンテンツを作っていくかというのは正直かなり難しいものがありました。過去に冊子類の編集に関わったことがあるのでソフトの扱い自体は多少の心得がありますが（実際、この同人誌の本文は全てIndesignにて作成しています）、その中身を自分で作っていくということについては素人同然ですので常に試行錯誤の連続でした。つたない内容ではありますが、読んだ人がクスッと笑ってくれたり、図書館や書店に足を運ぶきっかけになってもらえれば幸いです。この本を手に取り、最後まで読んでいただきありがとうございます。

## 沖縄県立図書館職員が<sup>マジ</sup>本気で薄い本を作ってみた。 ～郷土資料編～

2021年1月11日発行

著者 RS(沖縄県立図書館資料班)

イメージキャラクター「ららちゃん」製作者 仲尾 涼子

編集 チーム「図書館の推し事」

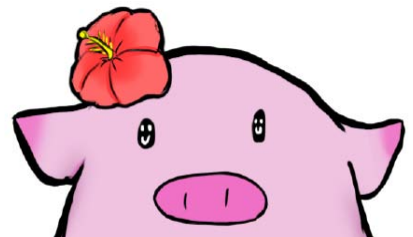
発行 沖縄県立図書館

印刷・製本 有限会社ドリーム印刷

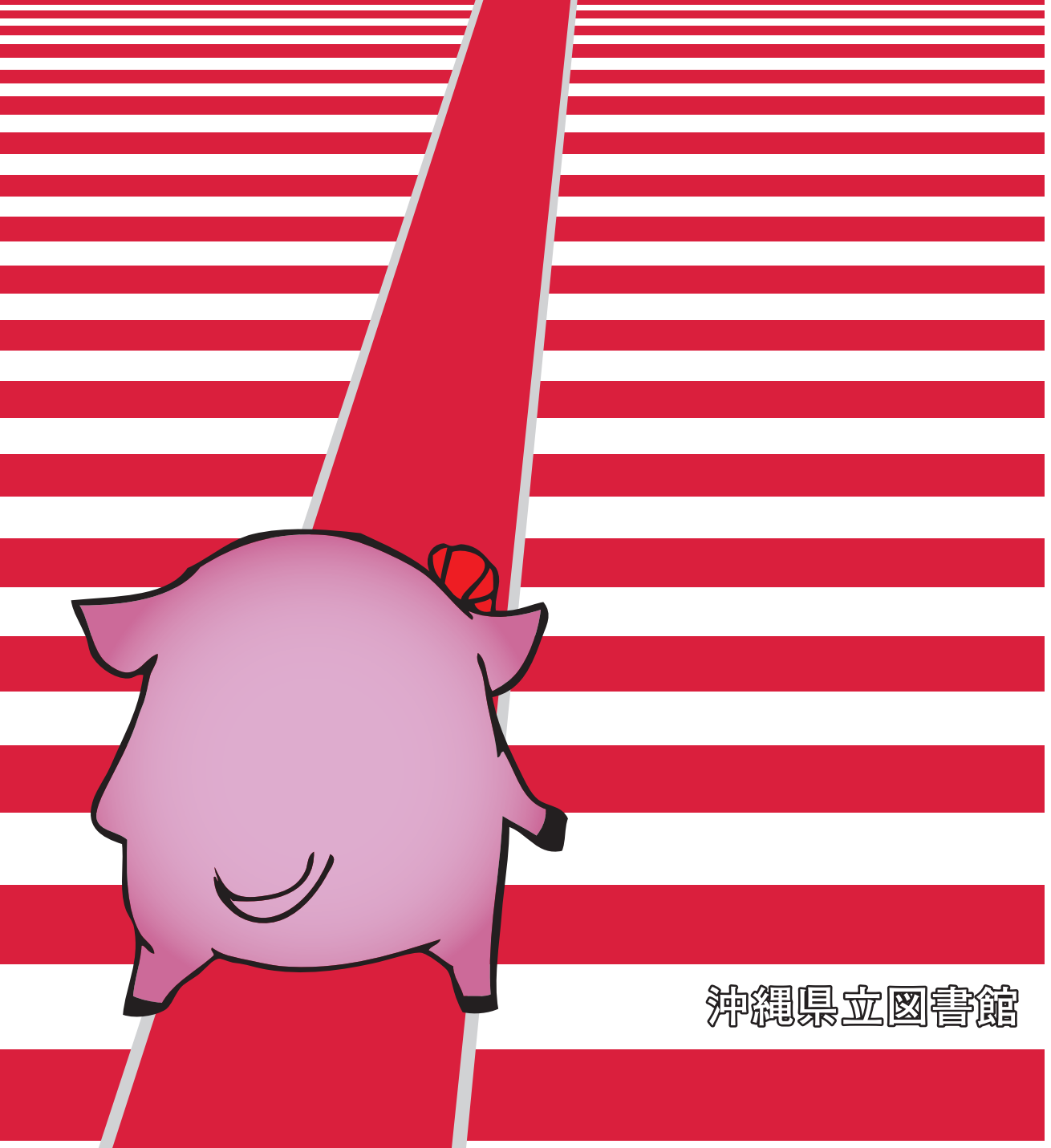
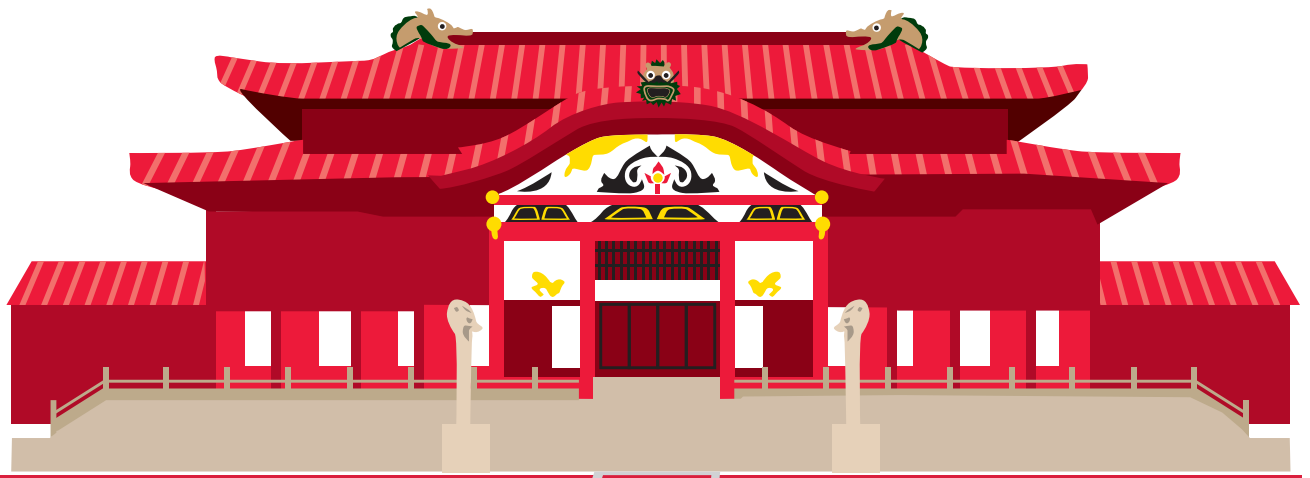
本冊子の私的複製は自由に可能です。

内容の改変・翻案は禁止します。

本冊子に登場する「ららちゃん」は、発行時点では著作権は、仲尾涼子職員に帰属しており、私的複製以外の利用は禁じます。なお、本冊子での利用は本人からの了解を得ています。







沖縄県立図書館